

阿尾島田A 2号墳

— 第2次発掘調査報告書 —

2006年3月

富山大学人文学部考古学研究室

阿尾島田A 2号墳

— 第2次発掘調査報告書 —

2006年3月

富山大学人文学部考古学研究室

目 次

第1章 調査の概要

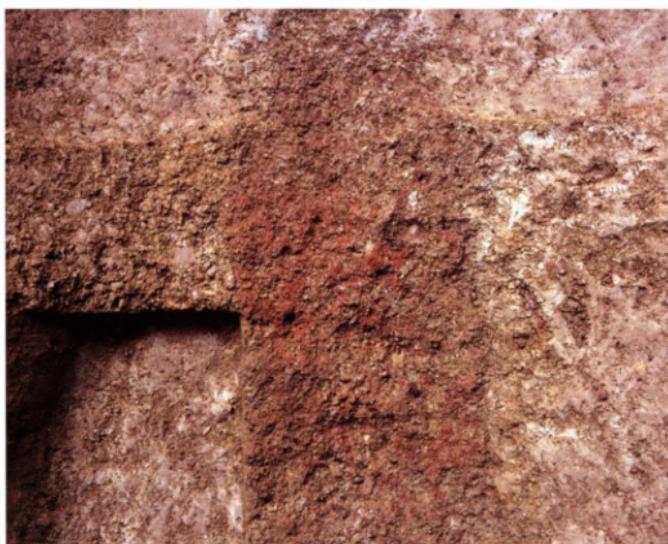
1 調査に至る経緯	黒崎 直	1
2 調査組織と調査の経過	福西磨衣・高橋浩二	2
第2章 阿尾島田古墳群の立地と歴史的環境	久慈美咲・村上しおり・高橋浩二	4
第3章 発掘および測量調査の成果		
1 調査経過と調査の目的	徳井恵子・用田聖実・高橋浩二	9
2 発掘調査の方法	黒木 甫・用田聖実	11
3 墳頂部の調査	東 良明・久慈美咲・福西磨衣	13
4 墳丘斜面の調査		
第1トレンチ	小林智海・村上しおり	13
第2トレンチ	黒木 甫・岡島怜子	16
5 測量調査の成果	伊藤剛士・真田泰光	17
6 A 2号墳の墳丘形態の復元	東 良明・岡島怜子・高橋浩二	17
第4章 まとめ	高橋浩二	21

例 言

- 本書は、富山大学人文学部考古学研究室が平成17（2005）年度に実施した、富山県水見市阿尾地内に所在する阿尾島田 A 2号墳の第2次調査の成果報告である。
- 発掘調査は、富山県教育委員会及び水見市教育委員会の指導と協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室の構成員を中心に実施した。
- 遺構・遺物の実測や製図等は、4で記す学生を中心となり、調査参加者全員が協力して行った。遺構・遺物の写真撮影は高橋浩二が行った。
- 本文の執筆及び製図、写真図版作成は、黒崎 直（富山大学人文学部教授）、高橋浩二（富山大学人文学部助教授）、東 良明・伊藤剛士・岡島怜子・尾上さやか・久慈美咲・黒木 甫・小林智海・真田泰光・徳井恵子・福西磨衣・村上しおり・用田聖実（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）が担当した。
- 本書の編集は、高橋浩二が担当した。
- 上層の色調は、『新版標準上色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術公議事務局監修　財團法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
- 出土遺物及び記録書類等は、現在、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
- 本書の作成にあたって、西井龍儀氏（富山考古学会副会長）、水見市教育委員会をはじめとする方々から御教示ならびに御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 本書は、平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究」及び平成17年度富山大学人文学部額附配分経費（フィールドワーク・実験系補完経費）の活動成果を含むものである。



主体部全景（南東から）



赤色顔料検出状況（南東から）

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯

水見市「柳田布尾山古墳」の発見（1998年10月）は、富山県下のみならず北陸における「古墳時代史」に見直しを求める大きな出来事であった。またそれに引き続く「阿尾島田古墳群」の発見（1999年11月）も、そこに「前方後円墳」の可能性を持つ大型古墳が含まれることで、大いに注目された。まさに突然に、これまで中規模以上の前期古墳は存在しないだろうと考えられてきた富山湾西部の沿岸地域で、全長107mという日本海側最大級の古墳と、越中最大級の可能性を持つ「前方後円墳」が確認されたのである。

この相次ぐ発見は、富山県の古墳文化が「俱利伽羅峰」を越え「北陸道」沿いに富山県にもたらされたという単一のルートではなく、日本海に腕を突き出すように存在する能登半島という「海の道」をも経由してもらたらされたという、新たなルートの存在を我々に示唆するものであった。

柳田布尾山古墳については、その後、国の史跡に指定され、2006年の春にむけてその公園整備の工事が急ピッチで進められている。またそれに伴って、水見市教育委員会の手によって、後方部に穿たれた盗掘坑の整理と埋め戻しが実施され、その過程で盜掘によって搔き出された大量の土砂の「築かけ」も行われた。しかし、この大型古墳に副葬された品々をうかがい知る資料は、その一部さえ発見できなかったと仄聞する。前方後方墳という墳形は明確であるものの、その築造年代を知る手がかりとなる「遺物」は残念ながら全く不明なままである。

一方「阿尾島田古墳群」については、その中心であるA1号墳を2001年から3カ年にわたり、富山大学考古学研究室が主体となって発掘調査した。その結果、予想されたとおり全長約70mの前方後円墳であることが判明した。また後円部の中央からは埋葬主体である全長7m余の木棺が発見され、その内部から槍や刀、ヤスなどの鉄製品やガラス玉などの副葬品が確認された。しかしながら、年代を比較的類推しやすい土器類の副葬ではなく、また墳丘の調査区などからも土器類は出土しなかった。このため古墳の築造年代に関しては、主体部出土の鉄製品や玉類を手がかりとするが、残念ながらその詳細な編年研究は進展していない。関連の研究者の意見などを参考にしても、阿尾島田A1号墳が古墳時代前期の、その前半か後半か、あるいは中頃かという点では判断が異なる。その解決には関連古墳の調査も必要だし、さらに広い観点からの比較研究も求められる。

そのような課題をもち富山大学考古学研究室では、「日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究」（代表黒崎直）を立ち上げた。そして幸いにもこの研究は、2004年度から3カ年計画として科学研究費補助金事業として採択された。

その中の最大の事業は、A1号墳に寄り添うようにして築造されているA2号墳の発掘調査である。A2号墳の年代や副葬品の内容を明らかにすることにより、A1号墳や、ひいては阿尾島田古墳群の年代や性格が明らかになると期待されるからである。

そして2004年度の調査では、墳丘が方形であること、その中心部に長方形の墓壙が存在することなどを確認したが、墓壙を掘り下げるには至らなかった。最も重要な課題が今年度2005年度に持ち越されたのである。その調査の成果は、以下に記すこととなるが、これまでと同様、調査にあたっては水見市教育委員会を始め地元阿尾地区の皆様や、宿舎を提供いただいた四枚田正夫氏などから大きなご支援とご協力をいただいた。文末ながら感謝の意を表する次第である。

（黒崎 直）

2 調査組織と調査の経過

阿尾島田 A 2号墳の第2次調査は、下記のような組織を編成して実施した。本年度の主な目的は昨年に引き続き埋葬施設の解明、古墳の形態・規模の確認であり、その調査経過は第1表のとおりである。

第2次調査は、2005年8月1日から8月25日にかけて実施した。発掘の結果、墳頂調査区においては、上面での長さ2.15m、幅1.3m、深さ約0.45mを測る墓櫃1基を検出し、土層断面の精査等から底面での長さ約1.12m、幅約0.45mの、舟形ないしは割竹形の構造をもつ木棺を確認するに至った。しかし、木棺の小口部分の構造までは明確にすることはできなかった。副葬品については検出されなかつたが、木棺底面の中央より西側において、長さ0.4m、幅0.2mの範囲に赤色顔料のまとまりが確認された。第2トレンチにおいては、墳掘が検出され、それによっておよその墳形および墳丘規模を推定することが可能となった。第1トレンチからは、墳丘上部の黒色土層上面から、銅製の簪1点が出土した。なお、これらと並行して、A 1号墳・A 2号墳周辺の測量調査を実施した。発掘調査終了後は、墳頂部に関しては砂礫を敷いた後に旧土で覆い、他のトレンチは旧土のみで埋め戻した。

(福西麿衣)

発掘にあたっては、水見市及び水見市教育委員会、水見市立博物館、地権者の中崎他三男氏、石田みつ子、阿尾地区長及び地元の多数の方々、また宿舎を提供してくださった四枚田正夫氏とご家族の皆様には多大な御助力を戴いた。記して厚く御礼申し上げる。

(高橋浩二)

阿尾島田 A 2号墳発掘調査組織

調査主体：富山大学人文学部考古学研究室

調査責任者：黒崎 直（富山大学人文学部教授）

調査担当者：高橋 浩二（富山大学人文学部助教授）

調査参加者：福沢佳典、細田隆博、本田晃久、松森智彦、間野 達（以上、富山大学大学院人文科学研究
科学学生）

池田ひろ子、石黒智子、遠藤司洋、小倉尚子、小林高太、佐藤浩志、高橋彰則、高橋優香、
津田恵理子、西谷朋子、水谷圭吾、吉澤 蘭、東 良明、伊藤剛士、岡島怜子、尾上さやか、
久慈美咲、黒木 甫、小林智海、真田泰光、徳井恵子、福西麿衣、村上しおり、用田聖実、
赤座裕子、小川絵理香、北村志織、小松彩乃、下嶋明日香、竹中庸介、柄堀哲彦、松岡治奈、
皆川恒子、山崎 翔、吉田有里（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：大野 実（水見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

廣瀬直樹（水見市教育委員会生涯学習課学芸員）

久保浩一郎（富山市教育委員会埋蔵文化財センター嘱託）



写真1 発掘および測量調査風景

		調査内容				
		全体	墳頂調査区	第1トレチ	第2トレチ	第2トレチ拡張部
8 / 1	機材搬入、トレチ設定			トレチ設定	トレチ設定	
2				写真撮影、塗剤開始	塗剤開始	
3	塗剤開始			筆1点検出		
4				調査区を北に拡張		
5				写真撮影		
6	E区より赤色顔料を検出					
7				アゼの東側断面写真撮影、調査区をさらに北に拡張	調査区を南西側に拡張	
8	F区より赤色顔料を検出				調査区をさらに北東側に拡張	
9	F区より赤色顔料を検出			完掘状況写真撮影		
17	長軸断面写真撮影					
18	短軸断面写真撮影				南西側・北東側断面写真撮影	トレチ設定
19	長軸アゼの振り下げ					
20	短軸断面写真撮影、短軸アゼの振り下げ					
21	墳頂調査区完掘状況写真撮影					
22						写真撮影
23	赤色顔料の取り上げ					
24	古墳全体・赤色顔料の分布範囲写真撮影			埋め戻し	埋め戻し	写真撮影埋め戻し
25	完全発現	たち割り後完掘状況写真撮影、埋め戻し				

第1表 阿尾島田 A2号墳第2次調査の経過



写真2 発掘調査参加者

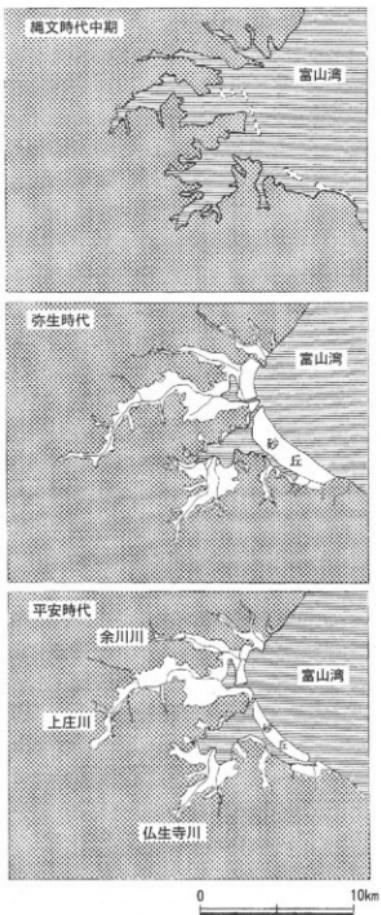
第2章 阿尾島田古墳群の立地と歴史的環境

1 阿尾島田古墳群の位置と周辺の古墳

水見市域は、能登半島の付け根部に位置し、南・西・北を標高200～500mの丘陵、東を富山湾に囲まれた地理的環境となる。かつて水見平野には、仏生寺川下流域を中心とする潟湖（ラグーン）と上庄川下流域を中心とする潟湖の2つが存在したと推定される（水見市史編さん委員会2000）。前者は一般的に「布勢水海」と通説されるもので現在でも十二町潟としてその名残を留め、後者は消滅し地質的・地形的調査によってその存在が推定され加納潟（仮称）と呼ばれる。

これらのラグーンが形成された時期は、縄文時代にまで遡ることができる。今からおよそ6000～5000年前、海平面は現在よりも5～6m高かったという。いわゆる縄文海進と呼ばれるこの現象によって、内陸まで海が入り込みリアス式海岸が形成された。一方、後に松田江浜と呼ばれる砂州が形成・発展することで養分に富んだ内海をつくりだし、朝日貝塚などにその名残を留める布勢水海の原形ができていく。また、丘陵においては、気温の上昇による降水量の増加によって地すべりが多発し、沖積平野が形成された。しかし、縄文後期・晩期にかけては、逆に気温が低下し、現海面よりも2mほどの海退が進行する。その結果、これ以降、砂州が急成長し、入り江が閉ざされ内海は淡水化した。気温の低下は弥生・古墳時代にまで及ぶとされる。砂州の急激な成長により淡水化したラグーン周辺には、低湿地帯が形成され、そのような低地部分で水田稲作が行われたと推定されるだろう。そして、古墳時代中頃から再び気温が上昇はじめ、8世紀から12世紀にかけては温暖化の時期であったとされる。この頃の水見周辺をものがたる史料として、越中国国司の大伴家持の万葉歌に、「…白波の 有磯に寄する 渥谿の 崎徘徊り 松田江の 長浜過ぎて 宇奈比川 清き瀬ごとに 鶴川立ち か行きかく行き 見つれども そこも艶かにと 布勢の海に 船浮け据ゑて 沖へ漕ぎ 辺に漕ぎ見れば 渚には あち群騒ぎ…」と、有磯海（富山湾）口にある布勢海（布勢水海）での遊覧の情景が詠まれている。

13世紀以降は大きな気候変化は無かったとされているが、江戸時代後半は寒冷な年も多く、たびたび冷



第1図 水見市の古地図
(水見市史編さん委員会1999より引用・加筆)

害による飢饉に見舞われることもあった。気温の低下によりわずかに海平面は低下し、ラグーン縁辺部での干拓が人々によって進められたと考えられる。なお、干拓の手が入る以前の布勢海は、海津、万尾地区一帯を中心として、仏生寺川流域の布施地区より下流域の範囲であったとされる。17世紀前半から19世紀前半にかけての史料には、十二町潟周辺の干拓を示した「正保岡絵図」などがみられことからも、比較的大きな潟湖地形がこの頃まで存続していたことが指摘できる。潟の干拓・開発の進展に対応して、布勢海(潟)→水見(庄)潟→十二町潟というように、名称と実体を変化させながら存在し続けた潟の様子が、これらの絵図から読み取ることが可能である(水見市史編さん委員会2004)。なお、加納潟については、ボーリング調査による泥層の植物化石分析等から、その存在が想定される。

弥生・古墳時代における2つの潟湖の存在を考古学的に証明する作業は未だ十分に行われていないが、遺跡の分布状況を検討してみると、海岸砂丘上や丘陵裾部、谷口に多くの集落遺跡が存在しているのに比べて、沖積平野上には今のところ遺跡の密集状況は確認されていない。これを根拠の一つとみなすことが可能ならば、この段階においても潟湖の存在が推定されるであろう。この潟湖の存在が、水見平野を地域的・歴史的位置付ける際のもっとも大きな特徴と判断される。

阿尾島田古墳群が所在する水見市阿尾地域は、上記のような特質をもつ水見平野のもっとも北に位置しており、古墳時代に潟湖が存在していたならば、おそらくその汀線は余川川近くまで達していただろうと思われる。古墳群は、余川川と阿尾川とに挟まれた丘陵の尾根上に立地しており、阿尾川から北は能登へ続く山間地帯となる。海岸までの距離は約600mと近く、古墳から富山湾を一望することができるほか、能登側の丘陵や岬を望むことも可能である。同一の山群には、稲穂オオヤチ古墳群や稲穂ウシロ古墳群、指先大谷古墳群、指先向山古墳群等があり、水見市域の中でも古墳が密集する地域の一つである。以下、『水見市史』(水見市史編さん委員会2002)や『前方後円墳集成』(岸本1992)などを参考にしながら、発掘調査が実施されたものを中心に水見の古墳について概観してみたい。

水見市域では現在380基ほどの古墳が確認されている。市域は南から仏生寺川流域、上庄川流域、余川流域、阿尾川流域、灘浦地区に区分することができ、北部の灘浦地区を除いた4小地域に古墳の濃密な分布が認められる。

《前期》

仏生寺川流域の柳田布尾山古墳は、富山県でもっとも規模の大きい古墳で墳長107.5mを測り、前方後方墳としては日本海側最大のものである。埋葬施設がすでに消失しているため副葬品の内容は不明であるが、粘土櫛の残欠や墳丘形態などから前期の築造が推定されている(水見市教育委員会2001)。ちなみに、阿尾島田古墳群とは約6.8kmの距離を置く。柳田布尾山古墳からさらに約3.8km南東の海岸台地上には高岡市桜谷古墳群³が存在する。桜谷1号墳は、従来墳長約62mの前方後円墳とされてきたが、近年では前方後方墳とする案が示されている(富山考古学会1999)。後出する2号墳は、墳長約50mの帆立貝形前方後円墳であり、石剣5点と鉄鏟車形石製品1点、菅玉6点が出土している(大村1925、富山県教育委員会1978)。余川川流域の阿尾島田A1号墳は、全長約70mの前方後円墳で、約6.8mを測る直葬の木棺内外より、鉄剣1、鉄槍1、鉄槍ないし鉄剣5、鉄鎌5、鉄製鋤先2、板状鉄斧1、袋状鉄鑿1、鐵製刀子2、鉄製ヤリガンナ2、鉄製ヤス1、ガラス小玉66、細身管玉24、錫製小玉6、ヒスイ玉1、緑色凝灰岩粗削品1が、第2主体部からは小型鏡1、ガラス小玉1が出土した(富山大学考古学研究室2002・2003、高橋・黒崎2004)。このほか、上庄川中流域の中村天場山古墳(墳長33.5mの前方後円墳)、仏生寺川と上庄川に挟まれた丘陵上の朝日潟山1号墳(墳長約33mの前方後円墳か)などが前期古墳と推定される。

《中期》

上庄川中流域のイヨダノヤマ3号墳は直径20.5mの円墳である。直葬の木棺内に副葬された短甲1・鉄刀2・長頭鎌21・鉄鏺1と、墳丘出土の須恵器から、5世紀後半の築造と考えられる。また、測量調査によって確認された同流域の泉1号墳（直径41~43mの円墳）と余川川流域地区の種積オオヤチA1号墳（全長約47.5mの帆立貝形前方後円墳）は、富山市古沢塚山古墳（全長41mの前方後円墳）、立山町稚兒塚古墳（直径46mの円墳）と並んで、この時期の県内でもっとも規模の大きな古墳である。

《後期》

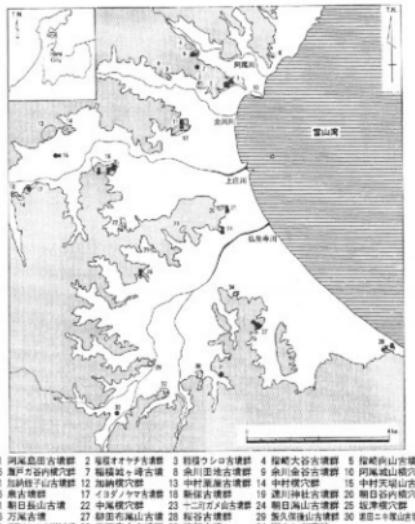
朝日長山古墳は推定全長43mの前方後円墳である。埋葬施設が半壊されたものの、九州系横穴式石室と想定される中から、鉄刀5・鉄劍1・鉄鋒1・長頭鎌約100・刀子2・冠帽飾り・胡ろく金具・杏葉2・管玉2・ガラス小玉6・須恵器・土師器などが出土し、墳丘出土の円筒埴輪等と合わせて、6世紀前半の築造が考えられている（藤田1983・1990）。後期において、40mを越える前方後円墳は、5世紀末葉～6世紀前葉に比定される小矢部市若宮古墳（全長50mの前方後円墳）と朝日長山古墳の2つで、双方とも埴輪をもつ県内唯一の古墳であることから、両地域に有力首長系譜の存在が想定されている。

これ以降、後期終末の水見市域は横穴墓

の築造が相次ぐ。加納横穴墓群（56基）、坂津横穴墓群（36基）、阿尾城山横穴墓群（11基）、脇方横穴墓群（7基）、朝日谷内横穴墓（1基）、中尾横穴墓（1基）など、これらの横穴墓は水見市域全体で約131基を数える。横穴墓は能登半島東部沿岸の七尾市にかけて濃密に分布しており、列島でも有数の集中地帯となっている。

このように、前期から後期を通じて水見地域には大規模で副葬品の豊富な古墳が存在するのであり、小矢部市域と並んで、富山県における古墳文化の搖籃・発展の地の一つであったといえよう。水見平野に存在したであろう潟湖や富山湾を介した海上交通及び漁撈活動などの沿岸拠点としての役割、そして小河川や岬道を通じての能登半島との陸上交通としての要衝的役割とが、有力首長墳築造の社会的基盤の一つとなつたことが想像される。

（村上しおり・高橋浩二）



第2図 阿尾島田古墳群の位置と周辺の遺跡



第3図 阿尾島田古墳群の立地と構成

2 阿尾島田古墳群の構成

阿尾島田古墳群は、標高33～60mの丘陵上に位置し、主墳の前方後円墳1基（A 1号墳）および方墳1基（A 2号墳）、円墳8基からなる A 支群と、円墳3基（うち1基は自然地形の可能性あり）からなる B 支群に分けられる。

A 1号墳は古墳群中もっとも高所に築かれ、全長約70mと推定される前方後円墳である。丘陵最高部に後円部を築き、前方部は尾根の走行に沿わせている。2001～2003年度にかけて4次にわたる発掘調査が行われている。A 2号墳は、A 1号墳後円部の北西側に近接し、2002年・2004年に実施された測量および発掘調査の結果、13m×11m程度の古墳であることが推定された。残る A 3号墳から A 10号墳は、A 1号墳東方の尾根筋上に分布し、測量調査がなされている。そのうちの主要なものを取り上げれば、A 3号墳は、直径約18m、高さ約2.5mの円墳で、墳頂部に径約10mの広い平坦面をもつ。A 1号墳側に小さな張り出し状の地形が観察されており、この部分が前方部である可能性が考慮される。A 4号墳は、直径約30.5m、高さ約2.75m（墳丘北側）～3.5m（墳丘南側）を測る群中最大の円墳である。墳頂平坦面が約12m～15mと広く、墳裾を巡る幅約2.5m～3.0mの溝や陸橋と思われる地形の凹凸が確認できる。A 6号墳は、直径約22m、高さ1.2m（墳丘北側）～3.2m（墳丘東側）を測る。墳丘平坦面が約12m～15mと同じく広く、A 4号墳側に長さ約5m、幅約11mの張り出し状の地形が観察される。A 7号墳は、直径約20.5m、高さ約1.2m（墳丘北側）～2.5m（墳丘南東側）、墳頂平坦面径約13mを測る。A 6号墳側に墳裾を巡る溝が観察される。A 5・A 8・A 9・A 10号墳はいずれも10m前後の円墳である。

B 支群では、丘陵の基部に直径約12m、高さ約1.8mの B 1号墳、先端部に直径約7m、高さ約1mの B 3号墳が築かれる。

A 1号墳以外の古墳からはこれまで遺物の出土がなく、また葺石や埴輪も未確認であり、古墳群の築造年代を知るのが難しい状況であるが、立地などを考慮に入れると、もっとも高所に位置する前期の A 1号墳が最初に築造された後に A 2号墳がつくられ、その後中期から後期にかけて他の古墳が継続的に築かれたと判断される。

なお、A 1号墳の後円部墳頂、A 3号墳及び A 4号墳頂には中世段階と推定される「コ」字形土塁が築かれている。この「コ」字形土塁は、古墳群の南東側丘陵上に位置する阿尾島尾山砦跡に1基、西側に位置する稻積城跡までの尾根筋上に9基の合計13基が確認されており、「コ」字形の全面がいずれも北側を向いていることから、丘陵の北方すなわち能登側からの攻めを意識した防衛ラインと推定される。

（高橋浩二）

注

- (1) 桜谷古墳群は行政上では高岡市に属する。しかし、越中国府など多くの史跡が存在する高岡市中心部とは二上山塊によって地形的にも分離されることから、水見市域の古墳の動向と合わせて考えたい。

参考文献

- 大村正之1925「桜谷古墳群」『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第7号
岸本雅敏1992「第2章 越中」「前方後円墳集成」中部編、山川出版社
高橋浩二・黒崎直2004「水見市阿尾島田 A 1号墳の調査と能越地方の古墳」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』
富山県教育委員会1978『富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書』

富山考古学会1999『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム発表要旨・資料集
富山大学人文学部考古学研究室2002『阿尾島田 A 1号墳－第1次・第2次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室2003『阿尾島田 A 1号墳－第3次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室2005『阿尾島田 A 2号墳－第1次発掘調査報告書－』

氷見市教育委員会2001『柳田布尾山古墳 第3次調査の成果』氷見市埋蔵文化財調査報告第33冊

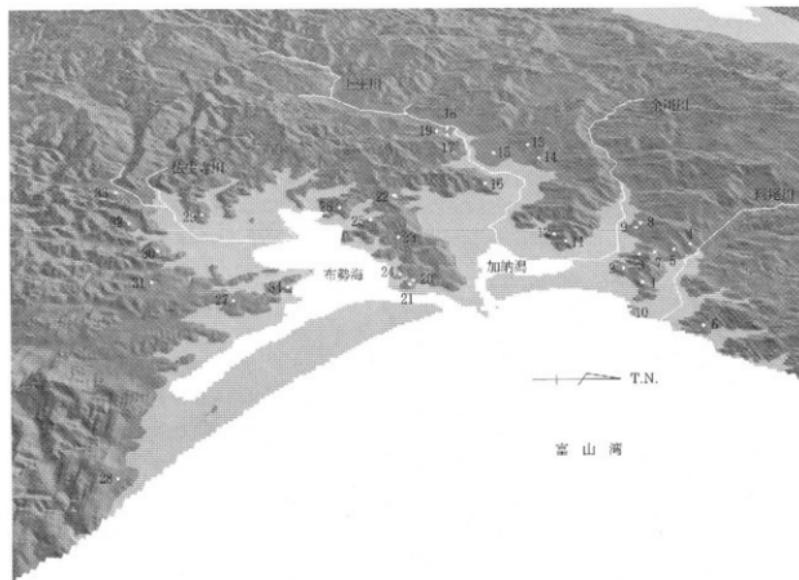
氷見市史編さん委員会1999『氷見市史』9資料編7自然環境、氷見市

氷見市史編さん委員会2002『氷見市史』7資料編5考古、氷見市

深井甚三・本郷真紹・久保尚文・市川文彦1997『富山県の歴史』、山川出版社

藤田富士夫1983『日本の古代遺跡』13富山、保育社

藤田富士夫1990『古代の日本海文化』、中公新書



第4図 氷見周辺の古墳の鳥瞰図（本田・松森作成）

1 阿尾島田古墳群	2 稲積オオヤチ古墳群	3 稲積ウシロ古墳群	4 推崎大谷古墳群	5 施崎向山古墳群
6 渥戸ガ谷内横穴群	7 稲積城ヶ峰古墳	8 余川田地古墳群	9 余川金谷古墳群	10 阿尾城山横穴群
11 加納蛭子山古墳群	12 加納横穴群	13 中村黒屋古墳群	14 中村横穴群	15 中村天塙山古墳
16 泉古墳群	17 イヨダノヤマ古墳群	18 新保古墳群	19 道川神社古墳群	20 朝日谷内横穴群
21 朝日長山古墳	22 尾尾横穴群	23 十二町ガメ山古墳群	24 朝日洞山古墳群	25 綾津横穴群
26 万尾古墳	27 柳田布尾山古墳	28 桜谷古墳群	29 舟久保後山古墳群	30 堀田ニキ塚山古墳群
31 堀田ナンマイダ松古墳	32 光西寺山古墳群	33 惣領古墳	34 国カンデ窪跡	

第3章 発掘および測量調査の成果

1 調査経過と調査の目的

阿尾島田古墳群は1999年11月に、西井龍儀氏による踏査によって発見された。その後、2000年3月から5月にかけて水見市編さん委員会によるA1号墳とA2号墳の測量調査が行われ、「『水見市史』に成績が掲載されている（水見市史編さん委員会2002）。

これらを基礎に、富山大学人文学部考古学研究室では、2001年から2003年までA1号墳の4次にわたる発掘調査を行った。その結果、約70mの前方後円墳と推定され、長大な木棺と多数の鉄製品および玉類等の検出という成績をあげることができた。しかし、供獻土器が出土していないことや、埋葬施設および出土遺物からの詳細な時期的絞込みが難しいことから、築造時期に関しては未だ不明な状況にある。

そこで、A1号墳の下所に接し後続的あるいは従属的な古墳と考えられるA2号墳の調査を実施することによって、間接的にA1号墳の時期を絞り込み、またA1号墳とA2号墳との関係を窺い知ることを目指した。A2号墳の調査は、2002年に測量を行い、2004年から発掘（第1次調査）を実施し、今回が第2次調査となる。以下では、第1次調査の成果をまとめたうえで、今回の発掘調査の目的を記したい。

第1次調査の成果

1. 古墳はA1号墳後円部の背後にあり、北西→南東へ伸びる丘陵とそこから北へ派生する小尾根とが接する地点の小平坦面を利用して築かれる。
2. A1号墳後凹部墳頂（標高59.92m）とA2号墳墳頂（標高57.57m）との標高差は2.35mで、平地との比高差は約53mである。A1号墳越しに富山湾や北アルプスの山群を望むことができる。
3. 第3から第6トレンチでは、墳裾と推定される地山傾斜変換点が検出され、その結果古墳の西側から南側では墳丘が遺存している可能性が高いと判断された。推定墳裾の標高は55.06～55.78mである。
4. 一方で、西側丘陵尾根筋にある第7トレンチでは、予測される位置と標高に墳裾が検出されなかった。
5. 第1・第2・第8トレンチでは、墳裾と思しき地山の傾斜変換点と、墳裾に伴うと思われる溝状遺構が検出された。しかし、崖崩れや山道による地形の改変が及んでおり、墳裾との認定ができなかった。
6. 墳丘構造については、下半部は地山削り出し、上半部は盛土による。
7. 墳頂部の中央部には、現地表面下約0.4mの位置に、上面での長さ2.15m、幅1.3mの墓壙が存在する。墓壙の主軸は東西の方角を示し、これは現墳丘の主軸とは15度ずれる。
8. 砧石や明確な段築、埴輪、供獻土器は検出されなかった。

発掘調査の目的

以上のように、崖崩れや山道によって地形が大きく変形しているため暫定的ではあるが、上の結果をもとに復元すると、古墳はおよそ13m×11mの方墳ないし椭円形状の円墳と推定することができた。

しかし、A2号墳の時期は明確ではなく、その結果A1号墳の築造時期や首長系譜の解明についても明らかにすることはできなかった。そこで今回の第2次調査では、前回に引き続き、①木調査の場所にトレンチを設定し墳裾と盛土状況を確認して、墳形および規模、墳丘構造を明らかにすること、②墳頂部にある埋葬施設の構築状況や木棺構造を明らかにし、副葬品や供獻土器を検出すること、そして③A2号墳の築造時期を明らかにし、そのことによって木大厳密な確定のできないA1号墳の成立時期を絞り込み、さらにA1号墳とA2号墳との関係を知る手がかりを得ることを主要な目的とした。

なお、並行してA2号墳・A1号墳周辺の測量調査を実施することとした。（徳井恵子・高橋浩二）



第5図 阿尾島田 A2号墳の測量図（縮尺1/400、用田製図）

2 発掘調査の方法

第1次調査と同様に、A 1号墳後円部墳頂にある原点 O1を基礎にして、A 2号墳頂中央部に原点 O2を設定した。第1次調査では、O1とO2を結んだ線を基準線として、これが測量調査によって復元された A 2号墳の推定主軸にはほぼ一致することから、調査杭の設定にあたっては原点 O2と、この基準線を基本としている。ちなみに、この基準線の方向は、磁北から西へ45度振っており、A 1号墳墳丘主軸と比べると北へ76度傾く。

第2次調査では、原点 O2はそのままであるが、基本とする基準線については変更することとした。すなわち、原点 O2から東へ6.5 m、9.5 m の地点に、E1杭、E2 杭を設け（第1次調査の基準線から42度傾く）、またこの軸線の反対側の O2から西へ3.0 m、10.0 m、13.5 m の地点にそれぞれ W1杭、W2杭、W3杭を設定し、これらをつなぐ東西軸線を基準線として扱うものとする。そして、この基準線を基本にして、発掘杭は、原点 O2から南西3.0 m、7.5 m、9.0 m の地点にそれぞれ I1杭、I2杭、I3杭（基準線から25度傾く）を、O2から南東4.5 m と7.0 m の地点に II1杭、II2杭（基準線から118度傾く）を設定した。

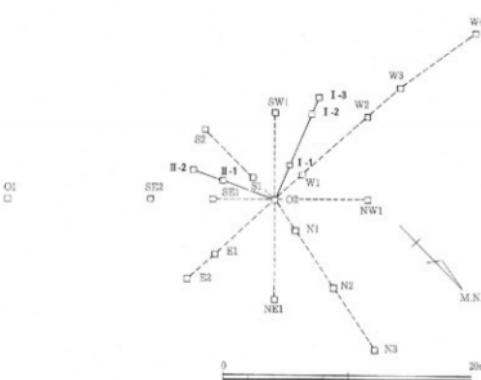
発掘調査区は、第1次調査に引き続き墳頂部に墳頂部調査区（3.0×3.0 m）を、墳丘斜面に第1・第2トレンチを設定し必要に応じて拡張を行った。第1トレンチ（1.0×4.5 m、ただしこの内の0.5 m×1.0 m の範囲は第1次調査第6トレンチと重複する）は南西側斜面に、第2トレンチ（1.0×2.5 m、拡張部2.0×1.2 m）は南東側斜面に位置する。

なお、第2トレンチ周辺では、かつて A 1号墳第1次調査（2001年）の際に、A 1号墳と A 2号墳との先后関係を探るべく発掘を行い A 2号墳墳裾が検出されており、その成果と付け合せるために、A 1号墳第1次調査時のトレンチを0.5×0.7 m の範囲で再発掘することにした。発掘調査総面積は、17.9 m²である。

（黒木 南）



（点線は第1次調査区、網かけは第2次調査区）



基準杭名	O1	O2	N1	N2	N3	NE1	E1	E2	SE1	SW1	S1
Δx (m)	-16.018	0.000	-0.419	-11.183	-0.417	-14.359	-0.945	-0.500	-0.518	8.010	-0.411
Δy (m)	14.420	0.000	-2.871	-0.417	-0.417	-0.945	0.000	0.000	3.248	8.010	2.497
Δz (m)	SW1	W1	W2	W3	W4	NW1	T-1	T-2	T-3	T-1	T-2
$\Delta \theta$ (度)	-0.419	4.684	3.000	10.000	13.500	20.958	6.574	1.268	3.170	3.864	3.975
$\Delta \phi$ (度)	7.988	5.202	0.000	0.000	-0.784	-0.018	2.718	6.787	8.157	-2.113	-3.268

第6図 阿尾島田 A2号墳調査区基準杭と配置（縮尺1/400、伊藤製図）



第7図 阿尾島田 A2号填調査区配置図（縮尺1/300、用田製図）

3 墳頂部の調査（第9図・第10図）

先述のように、第1次調査によって、墳頂部平坦面中央の現地表面下0.35～0.4 mの位置に、上面での長さ2.15 m、幅1.3 mの隅丸長方形を呈する墓壙が1基検出された。墓壙の主軸は磁北から西へ約60度振っており、また現墳丘主軸とは約15度のズレをみせる。第1次調査の時点では、墓壙内を深さ15 cmほど掘り下げ、墓壙上面の層位状況と供献土器の有無等の確認を行うに留めた。

第2次調査では、まず墓壙掘形内をA～Fの6小区に分けて精査していく、木棺構造が土層断面から把握可能になってから後に断面観察用のアゼを除去し、最終的に埋葬施設の構造とその構築状況の解明を行った。その結果、以下のようなことが明らかとなった。第10図を見ながら説明していこう。

墓壙は、地山を掘り込んで構築されており、粘性の高い粘土質の層（第11層）を底面としている。墓壙底面は長さ1.37 m、幅0.52 mを測り、墓壙の深さは約0.45 mである。なお、墓壙上面には墳丘盛土が残存することが判明した。

木棺については、腐朽のため遺存しておらず、平面および断面の精査にもかかわらず当初は明確な掘形を検出できずにいた。しかし、墓壙内を徐々に掘り進めていく過程で、墓壙中央の北西寄りの部分から、長さ0.4 m、幅0.2 m、厚さ3 cmほどの面的に広がる赤色顔料の層（第7層）を検出し、これが木棺底面に相当することが明らかとなった。短軸（A-A'）の土層断面を見ていくと、この第7層が第9層上面へとU字形の弧を描いてつながること、長軸（C-C'）の断面では、第9層および第10層がともに急傾斜で堆積し、また第8層を介して第9・第10層間の地山面が平坦面をなすことなどがわかった。

以上の結果、木棺は、底面での長さ約1.12 m、幅0.45 mを測る、舟形ないし割竹形の構造をもつものという結論に至った。長軸断面を見ると両小口部が外側へ向けてせり上がり、どちらかといえば舟形木棺の蓋然性が高いと考えられるが、しかしながら木棺上部や小口部の構造を平面的に明確化することができなかつたため両者の可能性を考慮しておきたい。なお、赤色顔料の層の下

にある暗褐色有機質土層（第8層）は、地山や盛土とも異なる土質であり、これが木棺材の腐朽によるものと考えられるならば、木棺底部の厚みは3 cmほどと推定される。棺底面の標高は、南東側で57.005 m、北西側で57.032 mというように、北西側の方が約3 cm高く、赤色顔料の存在も考慮すると、頭位は北西方位ではないかと推定される。第9・第10層は木棺の裏込土、第1～第6層については木棺の腐朽陥没後の流入土にあたる。石楠や粘土楠のような痕跡は確認できず、直葬によるものと判断できる。副葬品や供獻土器などの遺物は検出されなかった。

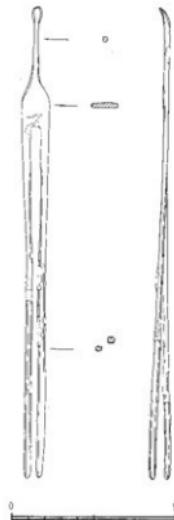
（東 良明）

4 墳丘斜面の調査

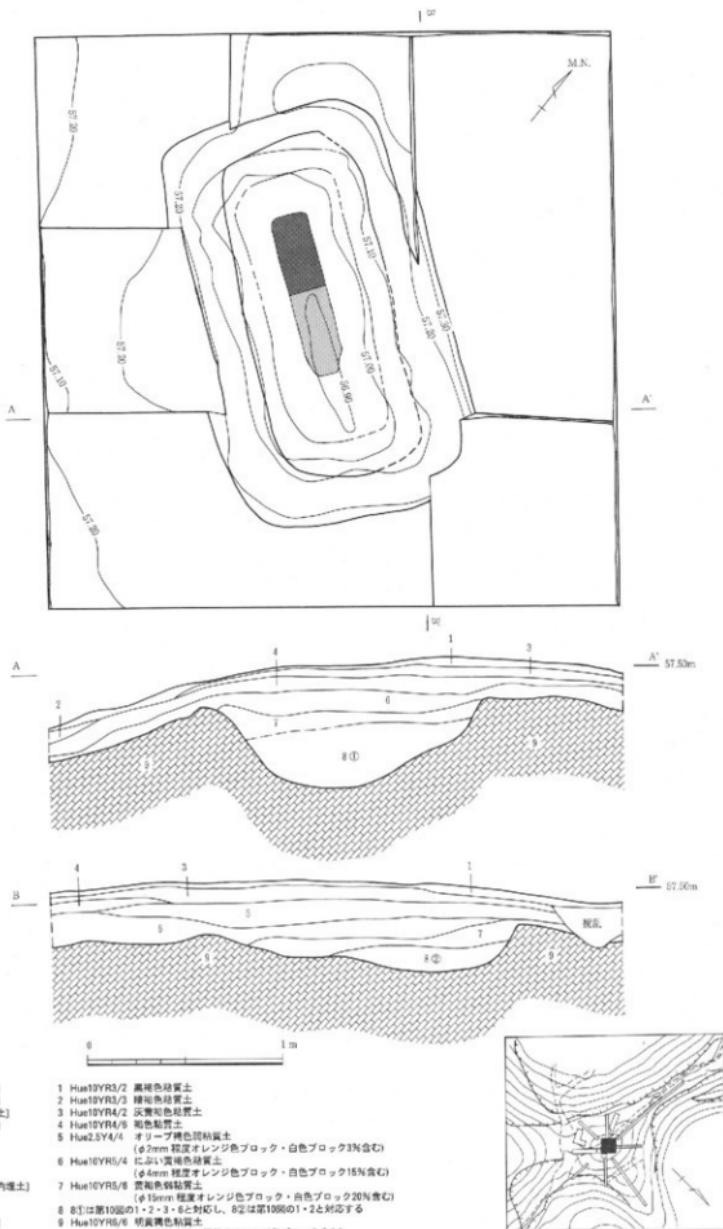
第1トレンチ（第11図上）

形および墳丘構造、さらには西側尾根筋の部分に短小な突出部が存在した場合のくびれ部の検出を目的に設定した。

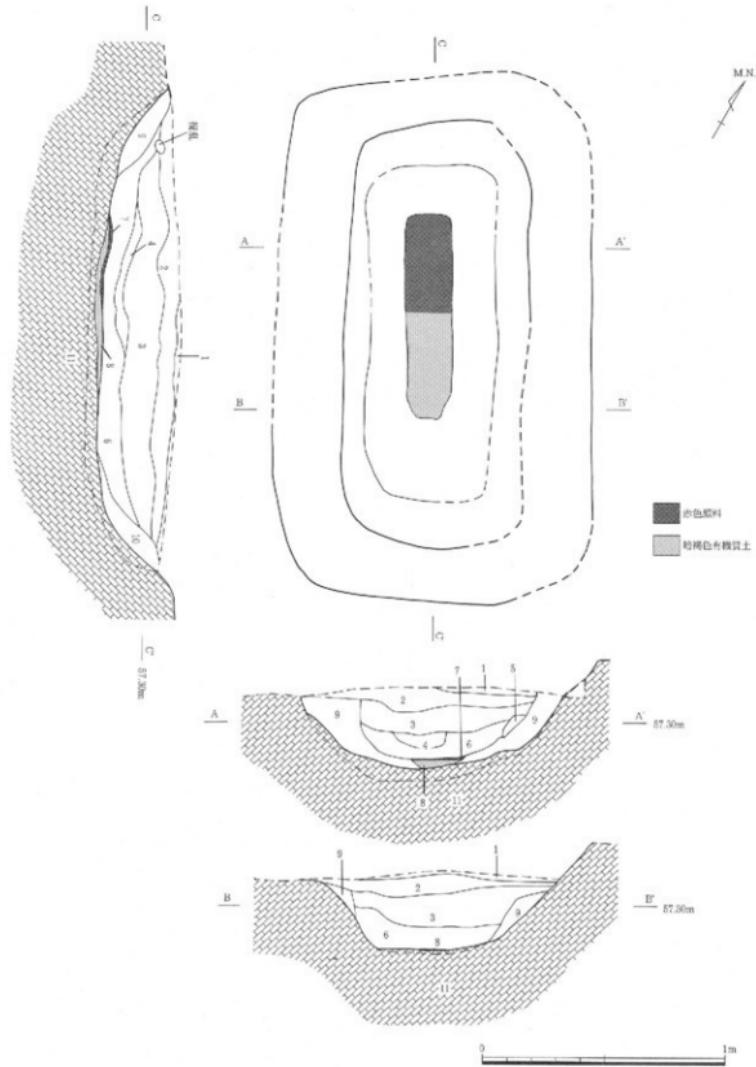
調査の結果、トレンチ北東から南西へ1.1 mの範囲において、墳丘盛土が1層確認された。一方、トレンチ北東端から2.5 mの地点においては、幅約0.7 mの帯状につながるにぼい黄褐色弱粘質土層を検出し精査したところ、この付近で地山が約0.6 m幅で水平に削られている状況であった。



第8図 簿（縮尺2/3、徳井製図）



第9図 填頂調査区平面図・断面図（縮尺1/25、久慈・福西製図）



[基盤内埋土] 1 Hu1EYR6/4 にぶい青褐色粘質土 (φ15mm 程度オレンジ色ブロック・白色ブロック30%含む)

2 Hu2SY7/4 深青色粘質土 (φ5~10mm 程度オレンジ色ブロック5%含む)

3 Hu2SY5/4 青褐色粘質土

(φ5~10mm 程度オレンジ色ブロック10%・3~15mm 程度の白色ブロック7%含む)

4 Hu2SY5/8 黄褐色粘質土

(φ2mm 程度オレンジブロック3%・10mm 程度の白色ブロック10%含む)

5 Hu2SY4/8 オリーブ色粘質土

(φ5mm 程度白色ブロック5%含む)

6 Hu2SY5/3 黄褐色粘質土

(φ5mm 程度オレンジブロック3%・3mm 程度の白色ブロック7%含む)

7 Hu2SY5/2 黄褐色粘質土

(φ5mm 程度白色ブロック5%含む)

8 Hu1EYR3/2 にぶい青褐色粘質土

(φ2~5mm 程度オレンジ色ブロック1%・白色ブロック1%含む)

9 Hu1EYR5/3 黄褐色粘質土

(φ2~5mm 程度白色ブロック1%・白色ブロック1%含む)

10 Hu1EYR5/5 黄褐色粘質土

(φ2~5mm 程度白色ブロック1%・白色ブロック1%含む)

[赤色粘土] 11 Hu1EYR6/6 明黄色粘質土 (白色粘土塊・帶状のオレンジ色ブロック含む)

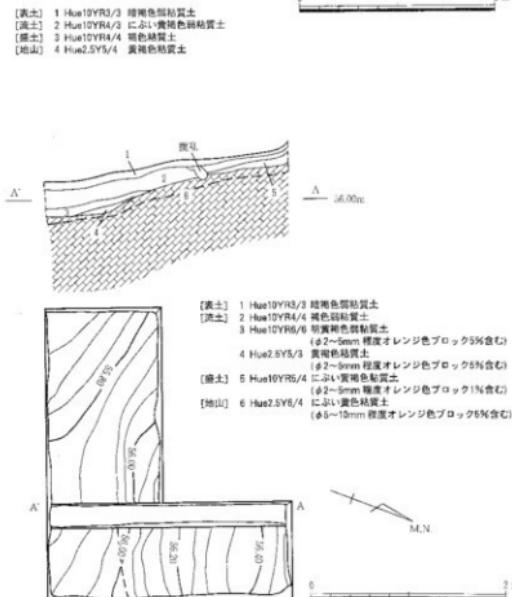
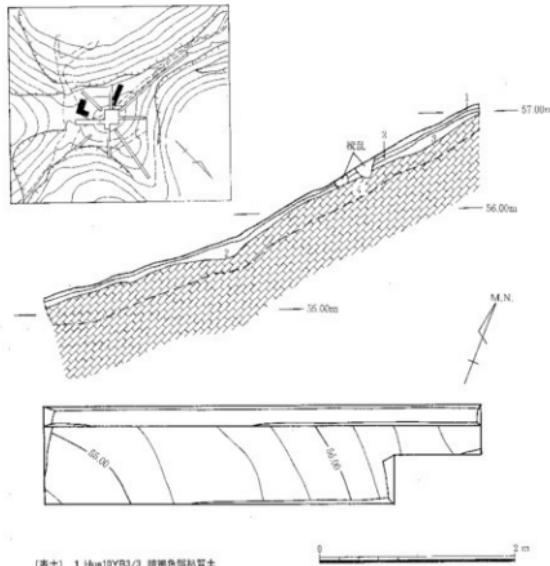
第10図 主体部平面図・断面図 (縮尺1/20、東・久慈・福西製図)

近接する第1次調査第6トレンチにおいても同様な層位と地山の傾斜変換が確認されていることから、当初、この地山の傾斜変換とその外側の幅狭の平坦面が埴堀に対応するのではないかと思われた。しかしながら、明確な掘形が確認されないこと、そして傾斜変換が約45度に達することなどから、埴堀と判断するには至らなかった。古墳とその周囲には山道が数多く存在しており、この傾斜変換および平坦面についても山道による削平の結果ではではないかと考えられる。なお、上記のにぶい黄褐色弱粘質土層の上面から舞が1点（第8図）出土したことでもこのことを傍証するのではないかと思われる。（小林智海）

第2トレンチ（第11図下）

埴堀及び埴丘構造、とくに方墳であった場合の隅角部の状況を把握するために設定した。はじめA2号墳埴丘斜面からA1号墳の方向へ長さ2.5m、幅1.0mのトレンチを設けたが、状況をさらに確認するために西側へ2回にわたる拡張を行い、最終的に長さ1.2m、幅2.0mの拡張区を設定した。

調査の結果、はじめに設定したトレンチの北端から南へ1.8mの地点において、地山の傾斜変換を確認することができた。断面図（A-A'）を見ると、この傾斜角度は30度を測り、また傾斜変換の外側に幅0.7mの



第11図 第1・第2トレンチ平面図・断面図(縮尺1/50、村上・小林・岡島製図)

平坦面が伴っていることがわかる。傾斜変換点の標高は55.929 mである。近接する第1次調査第4トレンチにおいて再検出された埴堀の標高は55.80mであり（この埴堀はA 1号墳第1次調査の際に検出された）、この値とほぼ一致することから、ここで確認された地山の傾斜変換については埴堀と判断することが可能と言える。

そこで次に、この埴堀と推定される傾斜変換を西側へ探索することによって、拡張部において隅角部を検出することとした。しかし、東寄りの1回目の拡張時においては、北東側から南西側へ向けて地山が緩やかに傾斜していく（傾斜角度14度）状況が見られるだけであり、さらに状況を確認するため西側へ再拡張したが、やはり同じように緩傾斜の地山面が認められるだけであった。拡張区南西側の標高は55.65 mを測り、先述した推定埴堀の標高と比較して0.25m低くなり、また方墳であった場合に想定される隅角部は拡張区外の一段低くなった尾根斜面に位置することになるから、この付近における埴堀はすでに消失したものと考えられる。よって、古墳の南西側へどのように埴堀がつながっていくのか明確にするには至らなかった。

なお、埴丘盛土としてはにぶい黄褐色粘質土層（第5層）が確認された。搅乱によってやや不明瞭ではあるが、盛土は、埴堀から埴丘側へおよそ0.9 m、標高56.22 mの地点から行われており、盛土基部附近の傾斜角度は約10度を測る。

（黒木 南）

5 測量調査の成果（第12図）

2004年までに作成した測量図を補足する目的で、A 2号墳南側の尾根斜面、A 2号墳西側へと続く尾根筋、そしてA 1号墳北側の尾根斜面について測図を行った。測図にあたっては、絶対高による表記、縮尺1/100、等高線25 cm 間隔で、平板測量を実施した。

測量の結果、A 2号墳は、西側から続く尾根と北側へとのびる尾根とが接する、頂部が比較的広めの平坦となった地点を選んで築かれていることが明確となった。

また、A 2号墳の西側へ伸びていく尾根筋頂部が幅2.0～6.0m程度の比較的平らな面をもつことや、その尾根頂部から約1.5m下がった北側に、長さ10.0m、幅1.0～3.0mほどのテラス状平坦面が認められ、これがA 2号墳北側埴堀付近を分断する山道へとつながるのではないかと推定されることなどから、古墳周辺には後世の人為的な地形の改変が多数及んでいることがわかった。

第12図で尾根筋西端に見られる高まりは、直徑8.0mほどの円墳のようにも見えるが、埴堀にあたる等高線が方形や円形に巡らないこと、高さが約1.0mと低いこと、周溝のようなものが現況で確認されないことから、自然地形と判断した。

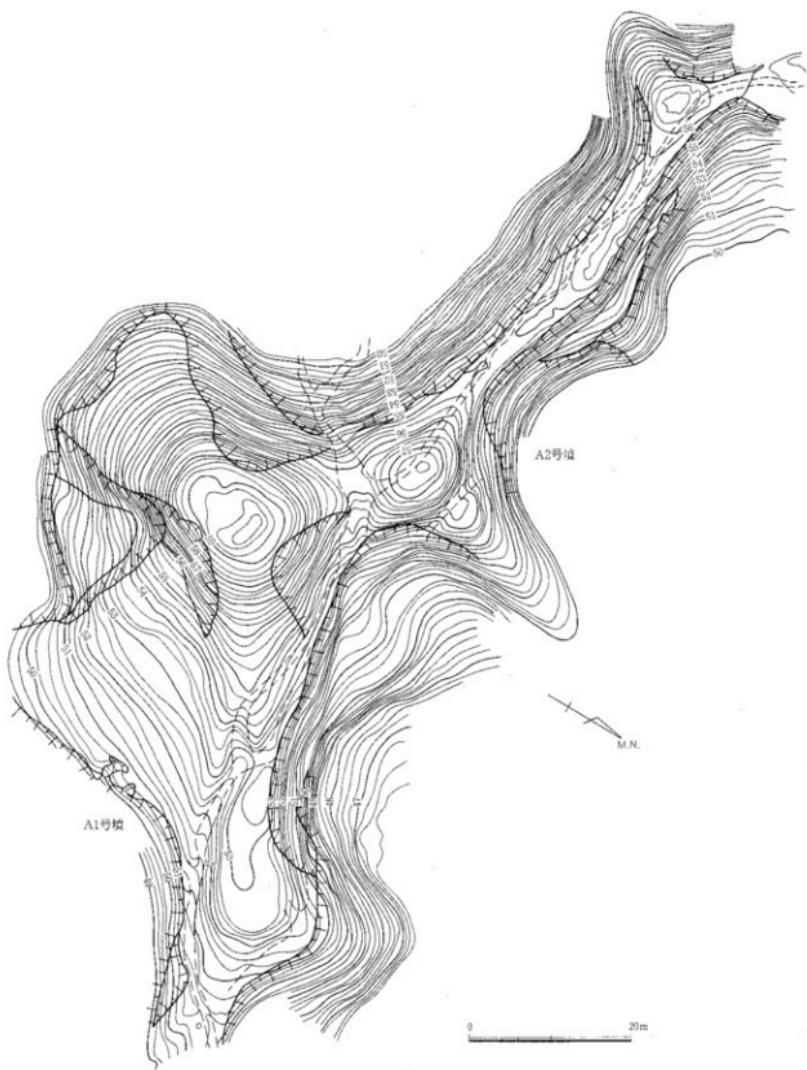
A 1号墳については、前方部の北側および南側周辺の等高線を補足した。

なお、阿尾島田古墳群の南西で、大きな谷をひとつ隔てた丘陵上に稲積オオヤチ古墳群が存在するが、その主墳であるA 1号墳について、後円部墳頂平坦面における標高の測定作業を実施した。稲積オオヤチA 1号墳については測量調査がすでに実施・公表されているものの、それは相対的標高に基づくものであった。結果、墳頂の標高は63.352mであることが明らかとなった。これには、水見市阿尾の…等水準点（点名9316、標高6.491m）を使用した。

（伊藤剛士）

6 A 2号墳の埴丘形態の復元（第13図）

第1次調査の成果からA 2号墳南西側における埴堀の存在が予測されていた。そこで、推定される埴堀の位置に今回の第1トレンチを設定したが、山道によると推定される地山の段状の削平が見られただけで、



第12図 阿尾島田 A1号墳・A2号墳の測量図（縮尺1/600、真田製図）

墳裾と思われる地山の傾斜変換ないし墳裾に伴うような溝を検出するには至らなかった。同じ様な地山の段状の削平とそれに伴うような土層の堆積状況は、東に隣接する第1次調査第5・第6トレンチにおいても確かめられており、第1次調査の時点では墳裾にあたるとみて報告したが、これらについても後世の削平によるものと改める必要がある。

これらの成果から総合的に評価していくと、A 2号墳の南側から南西側における墳裾の遺存状況も、北東側から北西側にかけてと同じように悪いと判断される。墳丘上部を構成する盛土についても、図に網掛けで表したように、墳裾とともに削平あるいは流失した箇所が多く見られ、遺存状況は各トレンチで一様ではない。また、西側尾根筋上に指摘されていた突山部に関しては、それを示すような地山の削り出しや溝状の遺構、上層の状況は確認されなかった。後述するように、この部分には方墳の隅角部が想定されることからも、後世の削平で消失してしまった可能性も低く、結果的に突出部については当初から存在しなかったものと考えられるようになった。

一方、A 1号墳との境界付近、つまり A 2号墳南東側は比較的墳丘の遺存状況が良好である。すでに報告したように、第2次調査第2トレンチでは、墳裾と判断される地山の傾斜変換を検出することができた。この傾斜変換点の標高は55.929mであり、第1次調査第4トレンチで再検出された墳裾の55.80mと比較してみても標高的に問題はないと思われる。A 2号墳の墳裾については、もはやこの部分にしか遺存していないものと判断され、よって両地点における墳裾の状況に基づき、これに墳頂部埋葬施設の立地と測量成果を加味して、下記に示すような方法と順序により、墳形および墳丘規模の推定復元を行ってみたい。

まず、2地点の墳裾は平面で直線的につながることから、方墳である蓋然性が高まった。したがって、以下では方墳として復元をすすめていくが、隅角部については、四隅とともに消失したものと判断される。

次に、古墳北西辺については、埋葬施設が墳丘のほぼ中央に位置することを前提にして、それを中心に古墳南東辺の想定ラインを折り返して推定することにした。それによると、墳裾は、西側尾根筋上では55.50 m の等高線付近にあるが、北側では54.25 m の等高線に沿うという形となる。北側部分の墳裾については広い範囲にかけて流出していることが等高線からも看取できる。

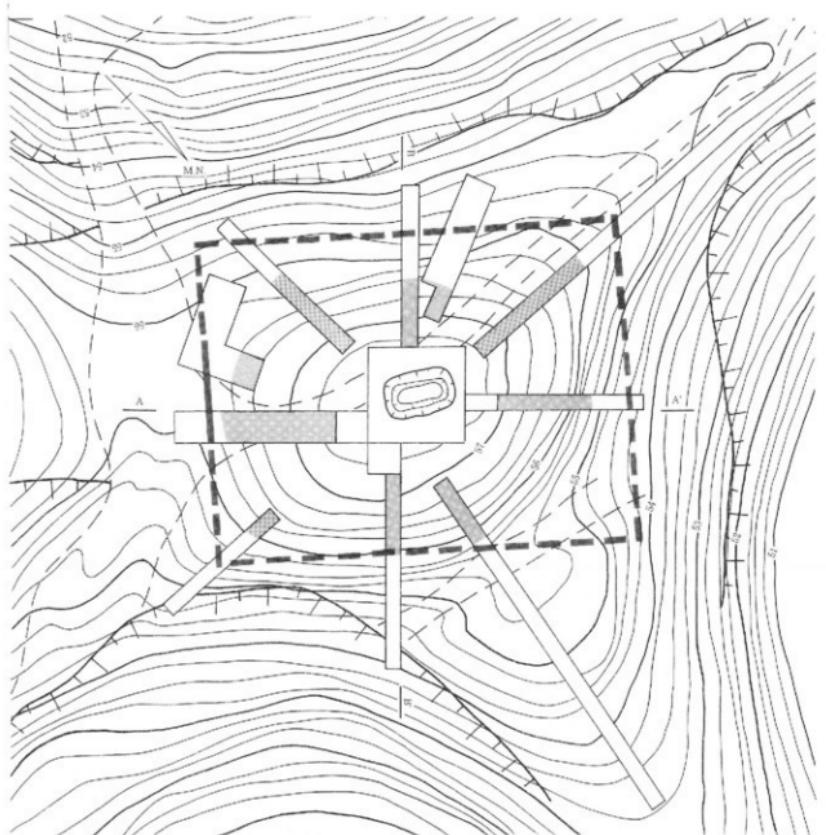
古墳の北東辺および南西辺については、根拠の乏しいところではあるが、まず北側に見られる残丘状の高まりは、第1次調査第1トレンチの結果、表上直下が地山であり、墳丘はこの場所まで及んでいないと考えられる。よって、墳裾はその手前の山道の通る箇所に存在したのではないかと推定され、そのことに基づき55.75 m の等高線を中心沿わせて、古墳北東辺の復元を試みた。そうしたところ、第1次調査第1・第2トレンチにおける盛土開始地点ともほぼ一致した。

南西辺については、北東辺の想定ラインを参考に、墳頂部埋葬施設を中心に反転復元することにした。その結果、墳裾は、55.75 m の等高線の前後に見られる幅狭の平坦面に沿うことになった。この位置は、最初に記述した第2次調査第1トレンチや第1次調査第5・第6トレンチにおける、後世の削平跡が見られる箇所とも重複することになる。

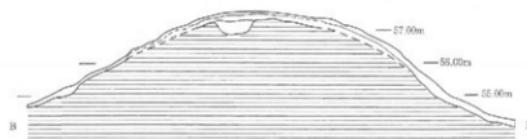
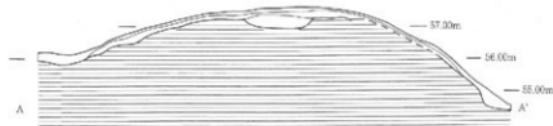
以上、各辺についての推定を積み重ねてきたが、四辺の想定ラインが互いに交わる箇所が隅角部となり、結果的に、A 2号墳は東西13.0 m、南北10.0 m の長方形を呈する方墳として復元することが可能である。墳頂部盛土上面までの高さは、墳裾の位置が確定している古墳南東側から測ると、現状で約1.75 m となる。

埋葬施設は墳丘中央部に1基存在し、主軸は磁北から西へ57度を測る。埋葬施設の主軸と北東辺・南西辺墳裾の方向とは7度しか違わないことから、埋葬施設は墳丘主軸にはば並行して築かれたものと考えられる。

(東 良明・高橋浩二)



■は埋土の遺存状況を示す



* 断面図(A-A', B-B')は墳丘斜面と埋葬施設との調査成果を合成して作成した

第13図 阿尾島田 A2号墳墳丘復元図（縮尺1/150、岡島製図）

第4章 まとめ

今回実施した第2次調査、そして第1次調査の成果をもとに、阿尾島田A2号墳については、次の諸点にまとめることができる。重複する箇所もあるうが、ここであらためて整理しまとめとしたい。

1. 古墳は、A1号墳後円部の背後にあり、北西—南東へ伸びる丘陵尾根とそこから北へ派生する小尾根とが接する小平坦面上に築かれる。A1号墳の墳頂(標高約60m)との標高差は現状で2.35mを測る。
2. 墳頂部には、木柵の埋葬施設1基が存在する。墓壙は隅丸長方形を呈し、その規模は上面で長さ2.15m、幅1.3m、底面で長さ1.37m、幅0.52m、深さ0.45mを測る。
3. 木棺は直葬のものであり、舟形ないし割竹形構造をもつ。規模は、底面の平坦となった部分では長さ1.12m、幅0.45m程度であるが、長軸断面図を見ると、そこから両小口部に向けて斜めにせり上がっており、上面における規模はさらに大きなものであったと想定される。断面図から考えると、舟形木棺の可能性が高いと評価されるが、しかし木棺上部や小口部の構造については、平面的に明確化することができなかった。木棺の主軸は、磁北から西へ57度傾き、墳丘主軸とはほぼ並行する。
4. 副葬品は出土しなかったが、木棺底面から赤色顔料が検出された。
5. 古墳南西側の第1トレンチでは、地山が段状に削平された跡とそれに伴う土層の堆積状況が検出されたが、これは後世の山道によるものではないかと考えられた。なお、ここからは簪1点が出土している。
6. 5に示すような地山の段状の削平跡は、第1次調査時にも確認されており、この時は墳裾にあたるとみて報告したが、これらについても後世の削平によるものと改める必要が出てきた。その結果、古墳の北東側から北西側にかけてと同じように、南側から南西側についても墳裾の遺存が悪いと判断される。
7. 一方、古墳南東側は墳丘の遺存状況が比較的良好であり、第2トレンチでは、標高55.929mの地点に墳裾が検出された。これは、近接する第1次調査第4トレンチで確認された墳裾の標高55.80mともほぼ一致するものである。A2号墳において墳裾が確認されたのは、この2地点のみである。
8. 墳形および墳丘規模については、7に示した墳裾を基本に、これに埋葬施設の立地と測量成果を加味して推定を行った。その結果、A2号墳は、東西13.0m、南北10.0mの長方形を呈する方墳として復元することが可能である。墳頂部盛土上面までの高さは、墳裾が確定している古墳南東側から測ると、現状で約1.75mとなる。西側尾根筋上に考えられていた突出部は、存在しないものと判断される。
9. 墳丘構造については、下半部は地山の削り出し、上半部は盛土による成形を基本にしている。
10. 莢石や段築は存在せず、埴輪や供獻土器についても検出されなかった。

以上のように、A2号墳について、13.0m×10.0mの方墳として推定可能になったこと、舟形ないし割竹形構造の木棺が1基検出されたことは、大きな成果と言えるだろう。築造時期については、古墳に伴う出土遺物がなく明確にしがたいが、弥生台状墓的な長方形という墳形を考慮するならば、古墳中期までは降らないものと評価される。同一尾根の東方にはA3号墳からA9号墳までのいずれも円墳が築かれており、これらとは墳形や立地を異にすることからも、A2号墳については、前方後円墳のA1号墳と時期的に近い古墳前期の築造が推定されるところである。

しかし、両墳の先後関係について明らかにすることはできず、その結果、A1号墳の成立時期を絞り込む手がかりを得ることはできなかった。A1号墳については副葬品等の再検討をさらにすすめ築造時期を確定することとし、それにより今後、阿尾島田古墳群に関する総合的な評価を行っていくことにしたい。

(高橋浩二)

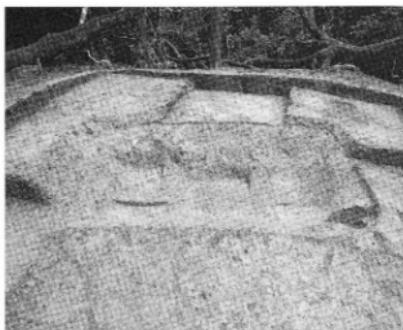
図 版



1 主体部全景（南東から）



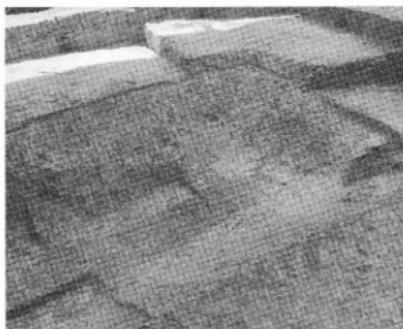
2 主体部完掘状況（北から）



3 主体部完掘状況（西から）



4 主体部完掘状況（南東から）



5 木棺底面の状況と赤色顔料（北東から）



6 木棺底面の状況と土層断面（北東から）



7 墓壇長軸断面（南西から）



8 墓壇内アゼ配置状況（西から）



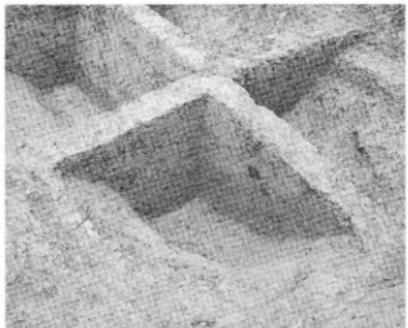
9 墓塚 F 区断面（西から）



10 墓塚 D 区断面（F 区側、南から）



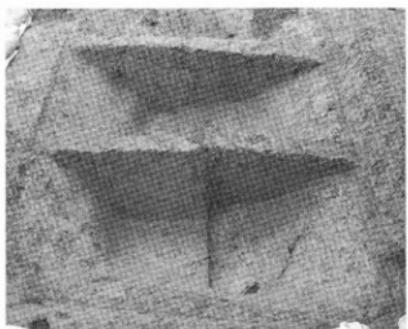
11 墓塚 D 区断面（B 区側、西から）



12 墓塚 B 区断面（南から）



13 墓塚短軸断面（北西から）



14 墓塚短軸断面（南東から）



15 完掘後たち割り状況（南から）



16 たち割り状況拡大（C・D 区短軸断面、南東から）



17 第1トレントにぶい黄褐色弱粘質土堆積状況（南西から）



18 第1トレント出土状況（南東から）



19 第1トレント完掘状況（西南西から）



20 第1トレント北壁断面（西南から）



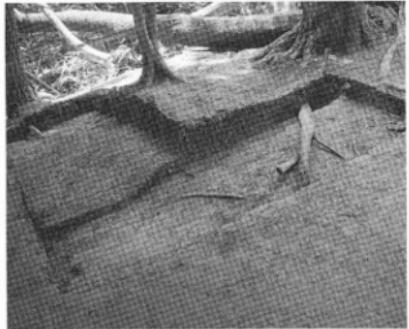
21 A2号填全景（南東から）



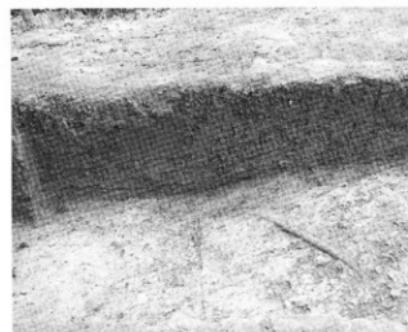
22 A2号填全景（東から）



23 第2トレンチ南西壁断面（南東から）



24 第2トレンチ完掘状況（南東から）



25 第2トレンチ填とその断面拡大（東から）



26 第2トレンチ完掘状況（南西から）

ふりがな	あおしまだA2ごうふん				
書名	阿尾島田A2号墳				
副書名	第2次発掘調査報告書				
卷次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	高橋浩二				
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室				
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL 076(445)6195				
発行年月日	2006年3月31日				
所収遺跡名	所在地	北緯 ○○°○○'	東緯 ○○°○○'	調査期間	調査面積 (m ²)
阿尾島田A2号墳	水見市阿尾	36度 52分 59秒	136度 58分 49秒	20050801 ～20050825	17.9m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿尾島田A2号墳	古墳	古墳	方墳	轡1点	全長約70mの前期前方後円墳と考えられる阿尾島田A1号墳に隣接する。調査の結果、墳頂部に舟形ないし割竹形構造の直葬の木棺1基が検出された。副葬品は出土しなかったが、木棺底面から赤色顔料が検出された。また、墳裾の一部が検出され、それにより古墳は、推定13.0m×10.0mの方墳と結論付けられた。築造時期については、A1号墳との関係等から、前期と推定される。

2006年3月25日印刷

2006年3月31日発行

阿尾島田A2号墳

- 第2次発掘調査報告書 -

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室

〒930-8555 富山県富山市五福3190

TEL 076-445-6195

印 刷 あけぼの企画株式会社